
烈火の太平洋戦線

天月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

烈火の太平洋戦線

【Nコード】

N3530N

【作者名】

天月

【あらすじ】

もし、太平洋戦争で日本とアメリカがほぼ同じ国力を有していたら……という架空戦記です。そのため、一部不快な場面も出る場合がございます。もしその場合は、速やかにご退場願います。

作者の都合上、更新が不定期になり、長期連載中止などが起こりえるのでご注意ください。

プロローグ1（前書き）

時代的には戦国時代末期から明治時代の最初です。

プロローグ1

戦国時代が終焉した直後のことであった。

突如、侵攻してきたポルトガル軍になすすべもなく、九州地方から各大名などが撤退した。

しかし、転機は訪れる。

九州地方を占領したポルトガル軍は本州へ侵攻の準備に入った。

そして、日本軍とポルトガル軍は下関海峡で戦闘に入った。

通称、下関海峡海戦である。

この海戦で日本軍が地の利を生かして、下関海峡を突破しようとするポルトガル軍を駆逐した。

翌月、九州に上陸した日本軍は、一気に南下する。

桜島の戦いで残存するポルトガル軍が全滅し、日本ポルトガル戦争は終結に向かうと思われた。

しかし、翌年、スペイン海軍が琉球国に接近したのだ。

すでに、使者により情報を知っていた、明、朝鮮、日本連合軍は亀甲船を用いて、スペイン海軍を洋上で撃破することに成功する。

すべてはここから始まったともいえる。

その数百年後。

限定的鎖国中であつた、日本にアメリカ大西洋艦隊が接近してきたのだ。

鎖国の停止と各港の開放。

しかし、それを幕府は拒否。

最初の日米戦争が勃発する。

日本軍側の鋼鉄艦は2隻、アメリカの鋼鉄艦は8隻であつた。

結果は、日本の敗戦であつた。

海軍をすべて失つたうえ、江戸の町が艦砲射撃にあつたためだ。

アメリカに割譲した土地は、現代で言う、千葉県南部と紀伊半島南部、伊豆半島、小笠原諸島であつた。

この戦争の結果、尊王討幕運動が広がり、幕府は天皇へ大政奉還するという形になった。

新政府はまず、海軍の拡張を図つた。

プロローグ2（前書き）

時代は明治から第一次太平洋戦争直前までです。

プロローグ2

当時、アメリカ独立戦争の傷が残っていた、イギリスをもとに、海軍の再編を図った。

新型鋼鉄艦東型の2隻を含む艦をイギリスで起工した。この2年後、日本はアジア発の戦艦を起工する。

戦艦富士型だ。35口径30センチ連装砲2基は当時の東アジアでは最強といっても過言ではない。対抗する清海軍の戦艦定遠型の2隻の主砲は30口径30センチ連装砲2基であり、射程では戦艦富士型が上であった。

国内経済でもそれなりの発展があった。

基本は軽工業だが、一部で重工業も現れ始め日本が近代国家への道筋をたどり始めた。

日本にとって初めてのチャンスが訪れる。当時の朝鮮半島は、農民を中心とする反乱軍と政府軍があちこちで戦闘をしていたのだ。本来日本はかわらないことを決めていたが、清が政府軍側に手を貸したことにより、反乱軍が日本に支援を要請したのだ。

日本はこれを断れず、了承し、ついに、日清戦争が勃発する。

黄海海戦。旅順沖海戦などを繰り返した。

日清戦争中、清国内で漢民族の暴動が発生する。南部で太平天国と称する国家が成立し、日本やイギリス、フランスなどに支援を要請

したのだ。

その結果、清は日本に降伏した。その後、中華革命が勃発し、満州族は中国北東部に追いやられたのだった。

だが、まだ日本の危機は続いていた。

中華革命に乗じてロシア軍が中国に居座り続けていたのだ。

次第に、ロシアと日本の間で蟠りわたかまりが募る。

そして、1904年日露戦争勃発。

当時、日本が保有していた戦艦は東ノ扶桑ノ富士ノ八島ノ敷島ノ朝日ノ初瀬ノ三笠ノ香取ノ鹿島の10隻であったが、東、扶桑の2隻は旧式の旧式な戦艦で戦力外状態。香取は、旅順港沖合で機雷に接雷し、轟沈。鹿島は就役したばかりで艦隊機動についていけなく、戦力外であった。

すなわち、使える戦艦は富士ノ八島ノ敷島ノ朝日ノ初瀬ノ三笠の6隻であった。

対するロシア、バルチック艦隊の戦艦は10隻、装甲巡洋艦6隻他。

三日にわたる砲撃戦の末、バルチック艦隊を撃破することに成功するも、富士ノ敷島ノ朝日ノ初瀬の4隻が撃沈されてしまったのだ。

翌月、日露講和がイタリアで成り立った。

日本はかなりの戦争債務があるにもかかわらず、海軍の再生に取り

掛かった。

戦艦ドレットノートが起工した時点で戦艦大和／武蔵の2隻が完成する。40口径30センチ連装砲4基を背負い配置で搭載していた。

その後、3番艦、4番艦の2隻は、蒸気タービンを搭載する弩級戦艦として起工した。戦艦薩摩／安芸である。

45口径30センチ連装砲4基であるが、すべて背負い配置のため両舷指向が可能であった。当時、屈指の戦艦が出来上がったのだ。

無論、日本に領土を持つアメリカは様々な要求を突き付けてきた。

しかし、日本はそれを無視していた。もともと、アメリカ国内では、南北戦争の傷が要所要所にあり、その復興作業で日本が儲けていたため、その腹いせにというわけでもあるらしい。

だが、この間にアジア情勢はかなり変わる。

それまでアジアの植民地化を控えてきた欧米勢力が一気にアジアの植民地化を図ったのだ。その結果、アジアのいたる国家が欧米の植民地になっていった。

1914年。

すでに、火がともっていた、バルカン半島で巨大な火柱が上がる。すなわち第一次世界大戦の勃発である。日本はこのバルカン紛争時代に戦争商売により財政が良くなってきた。

日本は、弩級戦艦の河内型2隻、超弩級戦艦の三笠型が4隻そして最新鋭の筑後型の2隻と航空機輸送特務艦しまね丸型2隻を中核と

する戦艦部隊を日本遣欧統合軍として送り込んだ。

中華民国からも大量の輸送船にのる10個師団がアジアからヨーロッパ戦線に送り込まれた。

しかし、フランス上陸作戦中に、ドイツ大海洋艦隊残存艦隊が襲撃をかけてきたのだった。

これは、2か月ほど前に行われた、ユトランド半島海戦が勃発しており、その生き残りがヴィルヘルムス「ハーフェン」に退避し、そこから出撃してきたらしいのだ。

無論、全艦がヴィルヘルムス「ハーフェン」に撤退したのではないだろう。一部はキールに逃げているはずだ。

今次大戦二度目の歴史上に残る海戦がおこなわれたのだ。

だが、兵力に勝る遣欧艦隊の攻撃は熾烈なものとなった。

日本側の被害は、戦艦筑波／磐城が小破、三笠／初瀬／敷島が中破。巡洋戦艦伊吹が撃沈され、鞍馬が大破した。

対してドイツ側の被害は、戦艦2隻撃沈、巡洋戦艦2隻撃沈であり、襲撃してきた艦隊主力を撃滅した。

なお、この作戦の前後に、特務艦しまね丸から戦闘機が発艦し、敵爆撃機を撃墜するという戦果をあげている。

そのあとは、とんとん拍子だった。

最後の会戦となった、デユッセルドルフ会戦で東アジア連合軍遣欧
統合軍がドイツ陸軍を破り、第一次世界大戦中へと導いたのだった。
講和会議直前に日本は、ドイツに対して戦艦の売却を求めた。

ドイツ側は渋ったものの、天文学的単位になるであろう賠償金を減
少させるよう日本が交渉すると言ったから、これを飲んだ。イギリ
スやフランスはこれに反対したものの、日本製の武器の購入代金に
ついては、帳消しにすると言ったのだ。

その結果、イギリスやフランスはしぶしぶながら、了承した。

一回、スカパフローに回航された後、日本の輸送船が4カ月後に入
港し、乗組員が戦艦2隻に乗り込み、日本に向かった。

中国海軍も一部の戦艦を購入しており、事実上、ドイツの戦艦は旧
式戦艦8隻になってしまった。

だが、代償として置かれた料金はドイツの早期復興に役立つとい
える。

戦後、アメリカが提唱した、二度とこのような大戦を起こさないた
めにとりて設立した国際連盟が成立した。

表向きは各国の話し合いで領土問題などを解決するというものだっ
たが……。

実態は、アメリカが世界を支配するためのようなものだった。

アメリカが、あれは嫌だ、こうでなければならぬと言い出したの

だ。

当時の二大勢力といってもいいほどの勢力を持っていた日本とアメリカはだんだんと緊張が高まっていった。

そんなこともあってか、日米の建艦競争が激化し始めた。

第一次世界大戦時に日本が竣工させた40センチ砲搭載戦艦は4隻。対するアメリカが1隻。

しかし、36センチ砲以下の戦艦はアメリカが有利という状況であった。

イギリスの発案によりロンドン海軍軍備条約が締結された。

日米間の主力艦の保有率は同じ。

アメリカはこれに反対したが、日本が40センチ砲戦艦2隻を退役させ、別の用途の艦にする代わりに、現在建造中の巡洋戦艦4隻を空母に、戦艦2隻を特務艦へ改装させることも求めた。さらにこれとは別に空母の保有枠も求めた。

紆余曲折の結果、それが認められたのだ。

だが、日本に悲劇が訪れる。

関東大震災が発生したのだ。

東京の下町が焼け野原と化したのだ。

戦艦長門などの支援もあったが、死傷者が1万人を超えた。

行方不明者も多数出ており、今持って正確な情報が入ってこない。そこへさらなる、危機が訪れる。

関東大震災の2年後、ウォール街の株価が一気に下落したのだ。

世界恐慌である。

アメリカは、日本がこれを裏でいっていると、言ったのだ。

「我が国が正統な方法で領土を手に入れたことに怒った日本政府が、我が国を地獄へ引き落とそうとした」

と。

当時の日本は天皇主義であり、限定的自由主義というものであった。

すなわち、さまざまな市場にかなりの制限をかけることで一気に下落するのを防ごうというものであった。

負もある。一気に業績が持ち直すということがなくなった。

そして、第一次太平洋戦争は引き金を引かれた。

アメリカ領フィリピン、マニラ湾。

偶然極東にあった、戦艦ワイオミングがマニラ湾内で謎の爆沈を遂

げる。

しかも、運の悪いことに日本の特殊潜航艇母艦「千代田」がそこにいた。

プロローグ2（後書き）

特殊潜航艇母艦「千代田」は史実の「千代田」とは別のものです。これは、第一次太平洋戦争で沈んでしまいます。

なお、この時、特殊潜航艇母艦「千代田」は肝心の特殊潜航艇を搭載しておらず、単に新任候補生の実地練習のために移動中でその帰り道にマニラによっていただけです。

第一次太平洋戦争（前書き）

ついに、第二次日米戦争すなわち第一次太平洋戦争が開戦します。

第一次太平洋戦争

戦艦ワイオミングが沈んだことは、アメリカを揺さぶった。

これで一気に対日戦争へ加速した。

当時、日本海軍は新鋭戦艦長門型2隻、扶桑型戦艦4隻をドックに上げていた。

欠陥戦艦というべき周防型戦艦2隻に筑後型戦艦4隻、三笠型戦艦4隻であった。

が、日本が配備を済ませた直後にはすでにアメリカ太平洋艦隊はマリアナ近海に迫っていた。

当初のアメリカ軍の戦略構想は、まず、日本近海の弱小艦隊を蹴散らし、一気にマリアナへ攻め込む。

その後、マリアナに特設の海軍設備を置き、軍整備を行い、おっとり刀で駆けつけた日本海軍主力艦隊を徹底的に撃破。

戦艦の艦砲射撃を日本本土に行えば日本は勝手に降伏してくるだろう。というものだった。

実際に、日本海軍主力艦隊は出港時のトラブルにより、出撃を行えなかったのだ。

このトラブルについてはいまだにわかっていない。

本来ならば、マリアナはあっけなく陥落、日本にアメリカ太平洋艦隊が接近するという危機が発生するはずだった。

だが、ある伏兵が連合艦隊主力到達までの足止めを行ったのだ。

いや足止めどころの話ではない。

竣工したばかりの空母赤城／高雄／土佐／鳳翔／白陽／黄月の6隻の空母を中核とし旧式防護巡洋艦を護衛に付けた第三艦隊が迎撃してきたのだ。

竣工時より赤城／高雄／加賀の3隻は一段空母となっていた。

当初、三段空母として計画されていただけあってか、トップと海面の差が大きい。

そこから、多数の航空隊が発艦したのだ。

俗に言うマリアナ沖海戦である。

三日間にわたる航空戦の結果、アメリカ側は空母1、戦艦2を撃沈され、戦艦2が大破し戦闘不能という被害を受けたのだ。

日本が航空主義に染まる原因の海戦であったともいえる。

この戦訓はアメリカには“航空機を撃墜できる能力を戦艦が持たなかったことが原因”としか伝わらなかった。

対して日本は“航空機でも戦艦は撃沈可能。将来性は十分にあり”としていた。

その後の、第一次太平洋戦争最大の海戦である、ミッドウェー海戦が勃発する。

日本側は新鋭の戦艦長門型2隻を中核に戦艦扶桑型/三笠型の計10隻でアメリカ太平洋艦隊は使用可能な戦艦のすべてをつぎ込んできた。

だが、日本はアメリカ太平洋艦隊撃滅が主目的ではなかった。

そう、太平洋艦隊が留守にしている、ハワイ真珠湾。

そこに第三艦隊の空母赤城/高雄/加賀/鳳翔の4隻が空襲をかけたきたのだ。

これよりも前に発生したウエーク島沖海戦で空母白陽/黄月が破損してたためこの4隻になったのだ。

真珠湾のドックや燃料タンクなどが空襲にさらされた。

数機の戦闘機が上がったが、日本軍の艦上戦闘機と死闘を繰り広げており、到底攻撃隊に接近できない。

こうしているうちに次々と真珠湾が軍港としての機能がそがれていく。

のちに生き残ったパイロットがそう語った。

ミッドウェー海戦自体は日本軍の勝利に終わった。

開戦の途中に舞い込んできた真珠湾空襲が原因であった。

その結果、ミッドウエーは日本に占領された。

その後、ジョンストン島も日本軍は占領したところで、主力艦隊を日本本土に張り付けたのだ。

具体的に言うと、主力艦隊を第一次日米戦争でアメリカに割譲させられた土地に張り巡らしたのだ。

本土の陸軍も一斉攻撃を行おうと攻撃態勢を整えていた。

そして、いまだその土地から脱出できずにいた一般市民がいた。

これを盾に日本はアメリカと和平交渉に入った。

一か月以内に停戦を前提とした交渉に応じなければ、一斉攻撃をかけ、彼らを一人残さず抹殺すると。

こうした結果、アメリカは交渉に応じ、停戦になった。

第一次太平洋戦争（後書き）

え？これ本編かって？

ごめんなさい。まだどちらかというところ、プロローグです。

一応この物語は史実の太平洋戦争に当たるものを本編にしていますから。

スペイン内戦そして第二次太平洋戦争へ

スペインで内戦が勃発したという情報はたちまち日本に伝わった。

ここで、日本は一計を案じた。

もしここで大規模に支援できたならば、ヨーロッパに足掛かりができるのではないかと。

結局、日本は大規模な軍をスペインに派遣することに決定したのだ。

第二次遣欧軍と名づけられた軍は日本軍だけでできていた。

空母白陽、黄月、戦艦扶桑、山城を中核とする艦隊であった。

白陽型空母は改装工事により単段空母と化していた。

だからと言って、搭載機数が劇的に変わったわけではなかった。

しかし、九六式艦上戦闘機を中心とした最新鋭機を搭載していた。

陸軍も九二式中戦車など中心に派遣してきた。

だが、欧州の常識を日本軍は嫌というほど味わらされたのだ。

空では、米国製戦闘機により簡単に撃墜され、陸では欧米の戦車に九二式中戦車は歯が立たなかった。

これにより、九七式中戦車が開発され後の名機の基本機となった九

八式艦上戦闘機の開発に拍車がかかったのだ。

初陣となった九八式艦上戦闘機は弱体化しつつあった、スペイン政府軍の戦闘機を数十分で全滅させるという戦果をあげたのだ。

戦争途中、BF109Bと誤射による戦闘もあったが、BF109が九八式艦上戦闘機を1機撃墜した時点で九八式艦上戦闘機側は、BF109Bを5機撃墜するという戦果もあったが。

しかし、九八式艦上戦闘機にある欠点があった。

機体強度が低いのと機銃の威力不足だ。

武装は7.7ミリ機銃4挺しかなかった。

この火力不足はあの名機では改良されつつ、九八式艦上戦闘機のいいところをすべて持っていた。

日本軍が大規模にスペインに軍を送ったせいも、スペイン国内で日本に傾く勢力も少なからずいて、政府を倒した反乱軍もこれらの勢力の動きも無視できなくなってきた。

その結果、スペインは限定的ながら、その一部を日本に譲り渡したのだった。

だが、逆に支援があり、海軍の復活なども挙げられた。

これがのちに欧州最高の戦艦と呼ばれる、戦艦プリシンプ・デ・アストウリアスの起工に至る。

この当時、東南アジアでは、一部の国が独立をなしていた。

インドネシアの独立に始まり、マレーシアと続いていた。

インドネシアは早い段階で日本と交易があったためか、大量の良質の石油と交換で大量の生産品などを受け取っていた。

すでに海防戦艦2隻が就役しており、主力となる軽巡コタバル型が艤装に入っていた。

さらに戦艦2隻を起工していたが、これは空母に変更されていた。

もともと、より大型の戦艦をフランスに発注していたのだが。

そうした、日本軍の背景でアメリカは次々と国際問題を上げていった。

まずは、日本国内でかくまっているとされる、自由ハワイ王国解放戦線の討伐であった。

そして、ようやく権益を手に入れたヨーロッパ及び中国からの撤退、日中同盟を中核とする新設された東アジア共同体の解体。

とても日本が飲むことができないものであった。

日本国内ではアメリカは再び戦争を望んでいると各新聞記事に乗って行った。

対するアメリカはより恒久的な世界平和を日本は崩そうとし、東アジア共同体なるものは世界の安定を損なうものだと言ったのだ。

こうした背景により日本はドイツと手を結んだ。

空母白陽と黄月ではなく、試験的に建造した商船改造空母を送ることにしたのだ。

“天空の城”、ヒンメルス・シュロツスを送ることにしたのだ。

無論、ドイツ製品も受け取った。

具体的に言うならば、He 162であり、He 280であり、Fw 190、Ju 87、Fw 200、DB 601、BMW 351である。

1939年第二次世界大戦勃発。

ドイツ・ポーランド国境線にあったドイツ軍が突如ポーランドになだれ込んだのだ。

1940年アメリカ国内にあった日本企業の資産を凍結すると宣言したのだ。

これに対して、日本も日本国内の米国企業の資産も凍結した。

1941年12月25日現地時間7時55分。

第二次太平洋戦争が開戦した。

スペイン内戦そして第二次太平洋戦争へ（後書き）

ついに第二次太平洋戦争が開戦します。

それにしても、クリスマスに日本軍からの空からのプレゼントとは

……自分でいっておきながら、なにか複雑な気持ちですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3530n/>

烈火の太平洋戦線

2011年6月14日00時39分発行